

鳥取県香取農家の生活時間構造(II)

田中 浩*・福士俊一*

昭和59年7月31日受付

The Daily Life of the Katori Settled Farmer in Tottori Prefecture (II)

Hiroshi TANAKA* and Shun-ichi FUKUSHI*

For the purpose of studying the daily life of the Katory settled farmers in Tottori prefecture, we made time study of 33 farmhouseholds in 1981. One half of the individual dairy farms had a young couple or successors who engaged in farming and cared for large herds of 30 to 49 dairy cattle. A few farmers had not a successor and cared for small herds of 1 to 4 dairy cattle. 10 dairy farms had established two joint holdings for livestock production and cared for large herds of 85 and 185 dairy cattle. The average working time per person was calculated to be 713 minutes in the small herds, 548 minutes in the large herds and 531 minutes in the joint holding. Sleeping hours were longer in the joint holding farmers than in the small herds farmers, and in case of females in the latter, they could not take enough time to sleep and do household work. In 1981, 21 farms had elderly persons in the household. The results suggested the necessity of shortening the working time and considering the counterplan for elderly labor forces.

緒 言

鳥取県大山原野に昭和21年入植した香取開拓農家は、営農、生活面での幾多の苦難を克服しながら入植35周年を迎えた。954 haの拡大な原野に35戸の農家が定着し、800頭の搾乳牛を飼育する西日本屈指の酪農の里を築きあげ、更に発展しようとしている。この間、牧草畑の土地基盤整備事業を導入して大型機械による飼料自給体制を確立するとともに、各種の営農、生活資金を導入して近代的な畜舎や住居を新築する農家が増えてきた。

しかしながら、最近の牛乳生産過剰対策として、54年

より牛乳生産調整が実施されているなかで、香取開拓地では搾乳牛の飼養頭数の凍結によって対処することとなり、更に、開拓一世の高齢化による労働力の低下が顕在化するなど多くの問題をかかえるにいたった。

著者らは前報³⁾で、56年の調査結果をもとに香取開拓農家の経営と生活について検討を行い、複数世代の基幹労働力の確保が飼養規模拡大の主要因であることを指摘したが、本報告では生活時間構造について、それをとりまく諸要因と関連させながら詳細な考察を試みた。

調 査 方 法

* 鳥取大学農学部農業経営学科農業労働科学研究室
Department of Farm Economics, Faculty of Agriculture, Tottori University

1. 調査対象

鳥取県西伯郡大山町香取開拓地の農家35戸のうち家畜飼養農家33戸を対象とした。

2. 調査期間

昭和56年の調査期間は9月2～4日の3日間、44年及び48年は9月1～3日、52年は8月31日～9月2日の3日間である。

3. 調査方法

調査方法は留置法と面接聴取法を併用し、農業経営及びその意識調査(経営主記入)、生活時間調査(農業従事者全員記入)、農業及び生活に関する意識調査(全員記入)を実施した。

調査結果とその考察

1. 調査農家の概況

香取開拓地では前報³⁾で指摘したごとく、昭和40年以來45戸が定住しているものの、若干の農家が脱農して56年には35戸が農業に従事している。これを経営組織別にみると第1表に示したごとく、酪農個別経営20戸(農家番号No.1～20)、酪農協業経営10戸(農家番号No.21～30)、育成経営1戸(農家番号No.31)、養豚経営2戸(農家番号No.32, 33)となる、この外に養蚕経営1戸、地区外通勤酪農経営1戸の農家が定住しているが、調査対象から除いた。なお、No.15農家は酪農・養豚家族協業経営を行っているが、56年に経営主夫婦と次男夫婦の担当部門の変更があったので、56年の資料はNo.15農家に長男及び次男夫婦、No.34農家に経営主夫婦の数値を記載した。

(1) 家畜飼養の推移

酪農個別経営農家20戸の56年における平均飼養頭数は26.6頭である。これを飼養階層別にみると、1～4頭規模農家1戸(農家番号No.1)、5～9頭規模農家1戸(No.2)、10～14頭規模農家はなく、15～19頭規模農家3戸(No.3～5)、20～29頭規模農家5戸(No.6～10)、30～49頭規模農家10戸(No.11～20)となり、30頭以上の大規模飼養農家が半数を占めている。

ここで、各農家の搾乳牛飼養頭数の推移をみると、零細規模農家では主酪経営から酪農経営に転換した44年から12年の間に規模拡大を計りえず、経営転換を余儀なくされた農家(No.33)もある。15～19頭規模農家は48年に飼養規模を拡大しているものの、それ以降は低滞を示している。20～29頭規模農家は44年には小規模農家と差がなく、48年には飼養頭数を倍増しているものの、それ以降はNo.7農家を除く各農家が低迷を続け、56年になって辛うじて20頭規模に達した農家が大半を占めている。

酪農個別経営の半数を占める30頭以上の大規模農家では、44年段階で既に20頭規模の農家(No.13, 19)もあり、その後、各農家ともに漸次規模拡大を計って、52年には30頭前後の飼養規模に達している。特に、No.16農家は44年の8頭から56年には35頭と4.4倍の規模拡大を達成している。

次に、44年に発足した大井酪農協業経営農家は、協業結成直前には小規模経営または育成経営に甘んじていたが、協業によって20頭規模に達している。更に、48年に発足したつばぬき酪農協業経営農家は、結成直前にほぼ20頭の飼養規模にあったが、協業によって30頭飼養規模に拡大している。

養豚経営農家(No.32, 34)は56年には成豚38頭飼養を行っているが、No.33農家は労働力の減退も手伝って酪農から養豚へと経営転換を余儀なくされた農家である。

このように、香取開拓地では漸次飼養規模を拡大してきたが、飼養頭数の増減は次に述べる世帯員数、世帯構成、開拓一世の高齢化などの人的要因に加えて、畜舎の構造、飼養方法、各種機械・器具、諸設備の如何によって規制されてくるので、これらの改善、充実が望まれるところである。

(2) 家族構成の推移

酪農経営はその労働特性からみて複数の基幹労働者の確保が要求される。香取開拓農家の家族構成を世帯員でみると、平均4.91人(男性2.55人、女性2.36人)で、52年より0.31人増加している。また、16歳以上の世帯員も3.60人(男性1.91人、女性1.69人)で、52年に比べて0.36人の増加を示している。これを各農家の世帯員数分布でみると、世帯員2人の農家は3戸、3人が6戸、4人が9戸、5人が3戸、6人が8戸、7人が3戸、9人及び10人が各1戸となっている。また、これを階層別にみると、大規模飼養農家では概して世帯員が多く、かつ16歳以上の世帯員4人を確保している農家が多くなっている。

次に、酪農労働をその作業分担からみると、夫婦が共同で行う作業が多く、夫婦を単位とする世帯構成が問題となってくる。香取開拓地では56年に2夫婦構成農家(A)が13戸あり、夫婦+後継者構成農家(B)も7戸と良好な世帯構成農家が20戸(59%)を占めている。これに対して、夫婦+幼児(D)あるいは夫婦のみ(E)の世帯構成にある農家が10戸もある。

更に、これらの世帯構成を飼養規模別にみると、零細規模経営農家では(D)、(E)の夫婦中心の不備な世帯構成にあり、大規模経営農家では44年段階で既に(A)、(B)

第1表 対象農家の概況

経営 組織	農家 番号	飼 養 頭 数				世帯員(56年)		世 帯 構 成				勤労生活時間(1人1日当たり)			
		56年	52年	48年	44年	計	16歳以上	56年	52年	48年	44年	男 性	女 性	56年	52年
		頭	頭	頭	頭	人	人					分	分	分	分
酪 農 個 別	1	4	6	4	4	4	2	D	D	D	D	740	740	685	623
	2	5	8	7	4	2	2	E	E	D	D	—	—	—	—
	3	16	7	12	9	3	2	D	D	E	E	890	397	920	—
	4	17	19	18	8	5	4	A	B	B	B	780	742	435	607
	5	19	22	20	12	6	4	A	A	B	B	630	733	730	466
	6	20	19	20	10	6	4	C	C	C	C	665	770	535	563
	7	20	15	11	6	3	3	B	C	C	C	590	670	350	560
	8	20	17	18	9	6	4	A	A	E	E	450	628	270	318
	9	21	16	16	9	4	3	C	B	B	B	690	492	485	475
	10	27	25	23	12	6	3	C	A	A	B	710	645	550	380
	11	30	17	15	15	3	3	B	B	B	B	675	543	340	440
	12	30	29	26	12	7	4	A	A	A	A	705	730	415	580
	13	32	32	27	20	7	4	A	A	A	A	605	760	580	665
	14	32	—	—	—	3	3	B	—	—	—	660	—	310	—
	15	35	32	14	14	7	4	A	A	B	B	756	562	420	610
	16	35	32	27	8	6	3	C	C	C	B	580	720	660	615
	17	36	27	25	10	6	4	A	A	B	B	415	670	280	550
	18	40	35	30	13	4	4	A	A	B	B	680	690	615	735
	19	46	40	25	21	9	6	A	A	A	B	605	683	500	482
	20	47	34	30	14	10	10	A	A	A	B	540	720	440	480
酪 農 大 三 井	21	85	67	90	—	5	2	D	D	D	—	660	600	370	430
	22				8	6	4	A	A	A	B	685	—	390	—
	23				(20)	7	4	A	A	B	E	685	652	440	517
	24				6	6	4	A	A	A	A	—	500	—	555
協 業 つ ば ぬ き	25	185	181	16	12	4	4	B	B	B	D	610	573	430	380
	26			20	18	4	2	D	B	D	B	510	—	470	—
	27			26	—	4	2	D	D	D	—	680	660	440	373
	28			22	14	2	2	E	B	B	B	690	695	180	440
	29			16	11	4	4	B	B	B	D	600	635	450	—
	30			20	10	3	2	D	A	A	A	640	690	480	480
育 成	31	11	23	30	11	4	3	B	E	E	D	—	370	505	457
養 豚	32	38	50	14	6	3	3	B	A	B	D	560	323	480	503
	33	10	(4)	(4)	(6)	2	2	E	D	D	D	840	700	—	620
	34	38	35	—	—	2	2	E	E	—	—	510	630	480	480

(注1) 飼養頭数のうち、農家番号23番の(20)は育成牛、33番の52年は搾乳牛、48年は育成牛、44年は和牛の頭数を示す。

(注2) 世帯構成記号のAは2夫婦、Bは夫婦+後継者、Cは夫婦+老人、Dは夫婦+幼児、Eは夫婦のみの構成を示す。

(注3) 表中の(—)は調査不記入を示し、21番、27番、34番の(—)は農業未就業を示す。

の2世代構成にあって規模拡大を計りうる素地ができていたとみてよい。しかしながら、2夫婦構成(A)にある農家でも、No.4, 5農家のように、後継者の結婚により世帯構成面から規模拡大を計りうる体制を整えてきたにもかかわらず、牛乳生産調整のために規模拡大を計りえない農家もある。また、No.10農家にみられるように、2夫婦構成であったものが高齢夫婦の死去に伴う世帯構成の劣化をきたしている農家もみられる。

このように、香取開拓地では牛乳生産調整に伴う飼養頭数の凍結に甘んじなければならない現状に加えて、開拓一世の高齢化による労働力の質の低下が現実の問題となってきた。これを酪農個別経営農家でみると、60歳未満の世帯員で構成される農家は、No.3, 7, 9, 15, 18の5戸にすぎない。残り15戸のうち、No.6, 12の農家は70歳以上の高齢者を擁している。今後2夫婦構成農家であっても世帯構成の劣化が懸念されており、大規模酪農経営を維持していくための労働力対策が必要となっている。

また、高齢化を酪農協業経営農家についてみると、大三井協業では発足当初の世帯構成は比較的良好で、No.24農家から次男(No.21農家)が独立して肥育部門を担当するなど協業構成員の充実を計ってきたが、56年に至ってNo.22, 24農家で高齢夫婦の離農などの労働力の後退がみられた。また、つばぬき協業では構成農家の不備な労働構成を協業経営によって補足してきたが、56年になっても改善されることなく更に弱体化しているなど、個別経

営と同様の問題をかかえている。育成、養豚経営農家では、No.31, 32農家が60歳以上の高齢夫婦からなり、No.34農家では、酪農・養豚家族協業発足当初の52年には次男夫婦が養豚部門を担当していたが、56年には70歳代の経営主夫婦が担当している。No.33農家は後継者の農外就労もあって、酪農から養豚へと経営転換せざるをえない世帯構成にある。

2. 生活時間構造

香取農家の生活は、大山原野を開墾して生産・生活基盤の建設に終始した耐乏生活に始まり、換金作物主体の畑作経営から家畜主体の主酪経営、山間草地酪農経営へと営農の転換に伴って生活様式を変えてきた¹⁾。

前報²⁾では、このような生活様式の変遷を調査年別、経営形態別に考察したが、本報では、これに加えて農家別、飼養階層別に検討を行った。なお、調査対象は、酪農従事者男性43人、女性37人(その内訳は第5表に示す)、肉用牛育成従事者男性なし、女性2人、養豚従事者男性3人、女性2人の総計男性46人、女性41人である。

(1) 生活行動様式

農業労働従事者の生活行動は起床、就寝時刻と農作業の開始、終了時刻に規制されてくる。香取開拓農民の調査期間中の生活行動を第2表に示した時刻布置でみると次のようになる。

まず、酪農個別経営農家では、平均して、男性は5時36分、女性はやや早く5時29分に起床。身仕度ののち、搾乳、給じなどの朝仕事を男性は5時52分に開始する。

第2表 農業従事者の時刻布置

区 分	男 性				女 性			
	起 床	農作業 開 始	農作業 終 了	就 寝	起 床	農作業 開 始	農作業 終 了	就 寝
	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分	時 分
頭 1~4	4:30	4:53	20:00	21:10	4:26	4:43	19:00	23:00
酪 5~9	—	—	—	—	—	—	—	—
農 15~19	5:16	5:41	20:20	23:20	5:23	5:48	19:51	22:46
個 20~29	5:53	6:09	20:13	23:03	5:41	6:16	19:47	22:53
別 30~49	5:37	5:52	19:54	22:15	5:30	5:56	19:13	22:20
平 均	5:36	5:52	20:03	22:27	5:29	5:57	19:24	22:32
酪 農 協 業								
大 三 井	5:45	6:38	19:18	22:15	5:35	7:39	17:45	22:23
つばぬき	6:00	7:04	19:29	22:02	5:11	5:54	18:06	22:20
平 均	5:53	6:54	19:25	22:07	5:21	6:39	17:56	22:21
育 成	—	—	—	—	5:20	5:43	19:00	22:23
養 豚	5:12	5:35	18:42	21:51	5:37	6:17	18:37	21:45
全 農 家	5:40	6:07	19:46	22:19	5:27	6:09	18:56	22:26

(注) 表中(—)は調査不記入を示す。

女性は少しおくれて5時57分に開始している。8時29分に朝食をとり、休息をとってから、12時まで室内、室外作業に従事する。昼食、休息ののち、13時30分から午後の農作業、夕方の給じ作業を行い、17時から搾乳作業に従事、男性は20時3分に、女性は19時24分に1日の仕事を終える。夕食後に仕事を行う農家もあるので、夕食の時刻には差がみられるが、平均すると20時に夕食をとっている。この間に女性は食事の前後に炊事、後片付けなどの家事労働を行っている。就寝時刻は男性が22時27分、女性はややおそく22時32分に就寝している。

この時刻布置を階層別にみると、1～4頭規模農家の男性は早起き・早寝型で平均時刻より約1時間も早い。女性は早起き・遅寝型で就労時間が最も多く、睡眠時間が最小となっている。15～19頭規模農家では男女とも農作業終了時刻が最も遅い。起床、農作業開始時刻は早く、零細規模農家と同様にこの階層農家の長時間労働の現状を物語っている。20～29頭規模農家は遅起き型で、農作業開始時刻が最も遅く、終了時刻も比較的遅い。これは、この階層農家の世帯が開拓二世夫婦を主体とする構成であることに起因しているともみてよい。30頭以上の大規模農家の起床、農作業開始時刻は平均的な値を示しているが、農作業終了時刻が最も早く、しかも早寝型となっている。この階層農家では大型畜舎の諸施設が合理化されており、加えて、経営主夫婦＋後継者夫婦構成が7割を占めているために作業分担が十分なされていることに起因していると思われる。

次に、酪農協業経営についてみると、前報²⁾で指摘したごとく、勤務生活と消費生活が通勤によって分離され、かつ、勤務時間帯が規定されてその間それぞれの担当業務に専従している。起床時刻は男性5時53分、女性は30分早く起床する。男性は身仕度ののち6時34分に朝食をとり、7時までに協業施設に出勤する。大三井協業の男性は、協業施設の宿直の折に朝仕事に従事するほか、自宅畜舎の作業に従事することもある。協業施設の勤務内容は9時半まで搾乳、給じ作業を男性全員で行い、30分休息ののち、10時から12時までと、昼食、休息をはさんで13時30分から17時まで、協業事務、搾乳牛や肥育牛の管理、牧草畑作業などの担当業務に専従する。17時から19時まで全員で搾乳作業を行い、作業の打ち合わせなどの会合を行ってから帰宅する。19時35分に夕食をとり、22時21分に就寝する。週1回の農休日をとる場合は、搾乳作業終了後10時から17時まで協業施設を離れて自由行動をとっている。

つばぬき協業の女性の勤務は自宅畜舎勤務と協業施設

勤務に分かれている。勤務時間は8時から17時と規定されているが、朝仕事に自宅畜舎で飼養している育成牛の給じ作業を行っている。朝食、後片付けののち、午前中は育成牛の管理と畜舎の掃除に従事する。午後の勤務は自宅勤務と協業施設勤務を半数交代で交互に行っている。協業施設勤務日には13時30分までに出勤し、協業畜舎の掃除と給じを3人で17時まで行う。自宅勤務日には午前中と同様の作業に従事しながら随時休息その他の生活行動をとっている。次いで、自宅畜舎の給じ作業を18時6分に終えて、夕食の準備にとりかかり、主人の帰宅を待つて夕食をとり、22時20分に就寝する。大三井協業の後継者の妻は、男性と同様に終日協業畜舎の掃除、給じ、放牧、子牛の世話などに従事し、No21農家の女性は夫とともに肥育牛の管理を行っている。また、No22、23農家の経営主の妻は自宅勤務に従事し、自宅畜舎の育成牛の管理を行っている。

養豚経営農家は早起き・早寝型で、男性は5時12分に起床し、5時35分に朝仕事を開始する。7時28分に朝食をとり、午前、午後の養豚労働に従事し、18時42分と最も早く1日の仕事を終え、21時51分に就寝している。

このように、各農家の生活行動の時刻布置は飼養家畜の1日のリズムに規制されており、世帯構成の整っていない小規模農家の労働負担軽減が要望される。

(2) 生活時間構造の推移

前項で検討した農業従事者の生活行動時間を経営組織別、階層別に第3表に示した。表中の44年の数値は調査期間3日間の平均値で示しているが、48年及び52年には雨天日があり、56年には調査第2日に香取入植35周年記念行事が終日開催され、第3日は雨天であったので、年次比較のため晴天日の生活時間値を用いた。

まず、男性の生活時間構造をみると、勤労生活時間は48年が最も少なく、以後は漸増して56年には645分と1日の44.8%を費やしている。睡眠時間は調査年によって差はあるが、ほぼ450分とあり、その他の生理的生活時間も220分前後費やしているから、勤労生活時間のしよせが社会的文化的な生活時間の短縮となっているとみてよい。

更に、56年の生活時間構造を酪農個別経営農家についてみると、勤労生活時間は647分で、52年に比べて27分長くなっているのに対し、睡眠時間は433分で52年との差は9分と若干減少し、社会的文化的な生活時間は129分で27分の減少を示している。これを階層別にみると、1～5頭規模農家は勤労生活時間が740分と半日以上働いているが、睡眠時間は450分で他の階層に比べて最も多くとっている。この農家は前項で指摘したごとく、早起き、早寝

第3表 生活時間構造の推移

(1人1日当たり, 単位:分)

年度	区分	男					女					
		勤 労	生 理 睡眠	其 他	家事	社会 文化	勤 労	生 理 睡眠	其 他	家事	社会 文化	
44	全 農 家	640(44.4)	457	216	3	124	490(34.0)	435	192	223	100	
48	全 農 家	579(40.3)	434	223	15	189	512(35.6)	429	163	203	133	
52	全 農 家	625(43.4)	452	211	8	144	485(33.7)	433	194	184	144	
56	全 農 家	645(44.8)	443	225	3	124	466(32.4)	416	201	238	119	
56	略	1～4頭	740(51.4)	450	220	0	30	685(47.6)	330	235	30	160
		5～9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	農	15～19	770(53.5)	363	187	0	120	630(43.7)	358	155	195	102
	個	20～29	636(44.2)	433	194	5	172	446(31.0)	377	186	275	156
	別	30～49	620(43.1)	447	247	3	123	453(31.5)	433	221	238	95
	小	計	647(44.9)	433	228	3	129	487(33.8)	405	203	232	113
	酪	大 三 井	680(47.2)	436	190	12	122	406(28.2)	432	208	290	104
農	つばぬき	617(42.9)	490	206	0	127	408(28.3)	413	192	266	161	
協	小 計	643(44.7)	468	199	5	125	407(28.3)	422	199	277	135	
業	育 成	—	—	—	—	—	505(35.1)	450	180	140	165	
	養 豚	637(44.2)	450	293	0	60	480(33.3)	495	210	195	60	

(注) 表中()は百分率を示し, (—)は不記入を示す。

型で農作業開始が最も早く, 多忙でゆとりのない生活を営んでいることを示している。15～19頭規模農家の勤労生活時間は770分と最も多く, 睡眠363分, その他の生理的生活時間も187分と最小の値を示している。この階層は農作業終了と就寝が最も遅くなっており, 労働時間の短縮と睡眠時間の確保が必要とされる。20～29頭規模農家では勤労生活時間が636分と2時間以上も短かく, 社会的文化的生活時間は172分と最も多く確保している。これは, この階層が前項の世帯構成にみられるように, 開拓二世夫婦中心の営農, 生活を営んでいることを示している。30頭以上の大規模農家は勤労生活時間が620分と最も少なく, 睡眠, その他の生理的生活時間の合計が694分と最も多く確保されている。この階層は農作業終了時刻が最も早く, しかも2夫婦世帯構成が多いため作業分担が適切となって最もゆとりのある労働に従事しているとみられる。

酪農協業経営農家の勤労生活時間は52年の641分から56年には643分と変化がなく, 個別経営農家との差も52年の21分から56年の4分となっている。睡眠時間は468分で52年に比べて20分短かくなり, 逆に社会的文化的生活時間が125分と20分の増加となっている。個別にみると, 大三井協業農家の勤労生活時間は680分で, つばぬき協業農

家より1時間も多く就労している。また, 睡眠時間はつばぬき協業農家が490分と8時間睡眠を保っているのに対し, 436分と7時間睡眠となっている。これは両協業の勤務内容に若干の差があることと, つばぬき協業農家の起床時刻が最もおそいことに起因している。

養豚経営農家の勤労生活時間は637分で酪農個別経営農家より10分短かく, その他の生理的生活時間が293分と最も多くなっている。これは世帯構成が高齢者夫婦に片寄っているためと思われる。

次に, 女性の生活時間構造の傾向をみると, 勤労生活時間は, 男性とは逆に, 48年の512分を最高として漸減傾向を示しているのに対し, 睡眠時間は430分前後から56年には416分に減少している。家事的生活時間は52年まで減少傾向にあったが, 56年には238分と54分増加し, 逆に, 社会的文化的生活時間が119分と52年より25分の減少となっている。56年の勤労, 家事労働の合計時間は704分で, 男性より56分も多く就労し, 睡眠時間の差も更に広がるなど, 女性の時間的な労働負担は依然として解消されていない。

また, これを経営組織別にみると, 酪農個別経営農家の勤労生活時間は487分で, 52年に比べて19分の短縮となるが, 酪農協業経営農家と比較すると80分の延長となっ

第4表 勤 勞 生 活 時 間 構 造

(1人1日当たり, 単位分)

性別	年度	区分	合計	室内作業					室外作業					業務 会合 通勤			
				小計	搾乳	給じ	掃除	その他	小計	飼料 収穫	サイロ詰	畑作業	堆肥 運搬		修理	その他	
男	44	全農家	640	247	113	66	42	26	367	126	91	89	33	0	28	26	
	48	全農家	579	315	170	76	44	25	264	100	24	43	13	44	40	—	
	52	全農家	625	331	136	82	91	22	271	63	69	39	45	23	32	23	
	56	全農家	645	322	131	84	79	28	280	69	43	100	45	14	9	43	
		1~4頭	740	290	220	70	0	0	450	370	0	0	80	0	0	0	
		酪農	5~9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		農	15~19	770	419	101	156	152	10	351	128	135	38	50	0	0	0
		個別	20~29	636	276	159	78	17	22	360	120	106	43	61	10	20	0
		別	30~49	620	360	150	94	82	34	260	29	41	116	39	30	5	0
		56	小計	647	350	148	98	76	28	297	70	64	88	46	21	8	0
性		酪農協業	大三井	680	194	84	20	90	0	292	52	0	204	36	0	0	194
			つばぬき	617	268	150	56	43	19	205	53	0	101	51	0	0	144
			小計	643	237	122	41	63	11	241	52	0	144	45	0	0	165
		育成	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		養豚	637	377	0	103	173	101	260	120	0	50	30	0	60	0	
	女	44	全農家	490	174	74	59	27	14	316	126	67	92	11	0	20	—
		48	全農家	512	257	118	78	53	8	252	84	20	95	8	5	40	3
		52	全農家	485	298	102	86	99	11	186	35	55	62	18	4	12	1
		56	全農家	466	283	70	94	90	29	183	30	37	70	38	3	5	—
			1~4頭	685	315	205	90	0	20	370	370	0	0	0	0	0	0
		酪農	5~9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		農	15~19	630	408	160	68	118	62	222	22	115	60	25	0	0	0
		個別	20~29	446	275	117	71	52	35	171	7	117	17	30	0	0	0
		別	30~49	453	297	89	69	89	50	156	17	15	67	50	7	0	0
		56	小計	487	309	111	70	81	47	178	29	53	52	40	4	0	0
性		酪農協業	大三井	406	180	0	140	40	0	226	0	22	114	46	0	44	—
			つばぬき	408	238	0	106	132	0	170	82	0	65	23	0	0	—
			小計	407	212	0	121	91	0	195	45	10	87	33	0	20	—
		育成	505	290	0	120	170	0	215	0	0	125	90	0	0	0	
		養豚	480	325	0	215	110	0	155	0	0	155	0	0	0	0	

(注) 表中の(—)は調査不記入を示す。

ている。睡眠時間は405分で、52年より26分少なく、社会的文化的な生活時間も17分減少して113分となった反面、家事的な生活時間が66分増加して232分となっている。更に、これを階層別にみると、男性と同様に、勤労生活時間は1~4頭規模農家が685分と最も多く、15~19頭規模農家も630分と10時間以上も就労しているのに対し、大規模農家では450分前後と3時間の短縮となっている。睡眠時間は、大規模農家では433分とり、零細規模農家より103分間多く睡眠をとっている。家事的な生活時間の階層間格差は

更に広がって200分以上にも達し、勤労生活時間とは逆の傾向を示している。これは、大規模農家の世帯構成が2夫婦構成が多く、家族就労者の間で作業分担が適切になされているために育児、炊事などの家事労働に専念できることを物語っている。

一方、酪農協業経営農家では、勤労生活時間が407分と52年より14分減少し、睡眠時間も19分減少して422分となり、更に、社会的文化的な生活時間も52分減少して135分となったが、逆に、その他の生理的な生活時間が44分増加し

て199分となり、家事的生活時間も41分増加して277分と家事労働に最も多くの時間をあてている。個別にみると、女性の勤労内容は両協業で相違しているものの時間量には差がみられない。睡眠時間と家事的な生活時間は大三井協業経営農家が多く、社会的文化的な生活時間はつばぬき協業経営農家が多くなっている。これは、自宅勤務の有無による生活行動の差に起因しているとみてよい。

育成経営農家は勤労生活時間と睡眠時間が他の農家より多く、家事的な生活時間が少ない。これに対して養豚経営農家は睡眠時間が495分と最も多く、社会的文化的な生活時間が60分と最少の時間構造にある。

ここで、香取農家の搾乳牛の平均飼養頭数をみると、44年10頭、48年18頭、52年20頭、56年24頭と倍増しているが、一方では、この12年間に20戸の農家で後継者の就労、結婚による労働力の充足がなされ、かつ家畜飼養労働の合理化、省力化が計られているので、香取としては農業従事者の労働負担は軽減されているとみてよい。しかしながら、現状のスタンション方式による搾乳牛飼養と牛の生理からみて、朝夕の搾乳、給じ作業の時間帯変更はできないので、必然的に早朝から夕方おそくまで就労せざるをえない。したがって、これらの作業の能率化を計り、更に、この中間に行く室内、室外作業の省力化により実労働時間の短縮と、他の生活行動の多様化を計るべきである。

(3) 勤労生活時間構造

香取農家の勤労生活時間を調査年別、作業別に第4表に示した。勤労生活時間の調査年別の変動は、男性では漸増傾向にあり、女性は漸減傾向にあったが、これを室内、室外作業に分けてみると次のごとくである。

室内作業時間は44年以降男女ともに増加の傾向にあったが、56年には若干減少して男性322分となり、勤労生活時間の50%を占めている。女性では283分と男性より39分少ないが、勤労生活時間に占める割合は61%と多くなっている。作業別にみると、搾乳作業は48年に男性が170分従事していたが、56年には131分に減少、女性も同様に、48年の118分から56年には70分に減少している。これに対して、給じ作業は男女とも漸増傾向にあり、56年には男性が84分、女性は94分従事している。掃除作業時間は52年に倍増していたが、56年には男女とも若干減少して79分及び90分となった。このように、室内の各作業は56年に至ってその所要時間がほぼ固定してきたとみられる。

一方、室外作業の就労状況は、44年には男性367分(57%)、女性316分(65%)と多くの時間をあてていたが、56年には男性280分(43%)に減少し、女性は更に減少し

て183分(39%)となっている。室外の各作業は調査年の飼料作物の生育状況や作業の進行状態に応じて異なってくる。調査資料によれば、44年には男女とも飼料収穫作業、サイロ詰作業、飼料畑作業に多くの時間をかけていたが、56年では飼料収穫作業が減少して飼料畑作業に重点をおいている。

次に、56年の勤労生活時間を経営組織別にみると、酪農個別経営農家の室内作業就労時間は男性350分、女性309分となり、52年に比べると男性7分、女性10分とわずかに増加している。また、飼養規模別では、男女とも15~19頭規模農家の就労時間が最も多く400分を越えている。作業別にみると、搾乳作業就労時間は男性148分、女性111分となり、特に、零細規模農家が200分以上の時間をかけている。給じ、掃除作業にも多くの時間をかけているが、特に15~19頭規模農家では男性308分、女性186分の時間をかけている。一方、室外作業就労時間は男性297分、女性178分となり、52年に比べて男性で3分、女性で39分の減少を示している。飼養規模別にみると、男女とも1~4頭規模農家の就労時間が最も多く、飼養頭数を増すにしたがって短くなっている。作業別では飼料収穫作業に男性が70分従事し、サイロ詰は男女ともに60分前後行っている。飼養規模別では、1~4頭規模農家が男女ともに飼料収穫作業に370分従事し、15~19頭規模農家は男女ともサイロ詰に多くの時間をかけている。

これに対して、酪農協業経営では構成員の作業分担がなされているため、各作業担当者の実働時間は表中の数値と大きく異なるが、協業経営としての平均値で個別経営農家と比較してみると次のようになる。まず、男性は室内作業に237分就労しているが、これは52年より82分の減少となり、個別経営農家よりも113分と大幅に少ない時間となっている。女性では212分の就労となり、これは52年より63分少なく、個別経営農家よりも97分の減少となっている。しかし、就労状況は両協業で差があり、大三井協業は室外作業に多くの時間をかけ、つばぬき協業は室内作業により多く就労している。作業別にみると、搾乳作業には男性が専従し、所要時間は122分と個別経営農家より短い時間で行っている。給じ、掃除作業は女性が専従し、搾乳牛及び肥育牛担当の男性が協力している。女性の給じ、掃除時間は各121分、91分で、個別経営農家の女性より1時間多くなっているが、男女の合計時間は協業経営が各162分、154分をにかけているのに対し、個別経営農家が各168分、157分で差はみられない。

一方、室外作業に男性241分従事しているが、これは52年より12分の減少となり、個別経営農家よりも56分短か

第5表 酪農経営農家の労働指標

区 分	調査 戸数	就労者数		計	搾乳牛飼養数			総労働時間(A)			搾乳労働時間(B)			B/A		
		男性	女性		総数	1戸当たり	1人当たり	総数	1戸当たり	1人当たり	1頭当たり	総数	1戸当たり		1人当たり	1頭当たり
酪農個別小計	19	31	26	57	527	27.7	9.2	32,701	1,721	574	62	7,460	393	131	14	22.8
酪農協業小計	10	12	11	23	270	(27.0)	11.7	12,203	(1,220)	531	45	1,470	(147)	64	5	12.0
合 計	29	43	37	80	797	(27.5)	10.0	44,904	(1,548)	561	56	8,930	(308)	112	11	19.9

(注) 表中の5～9頭規模農家は生活時間調査不記入

くなっている。女性は195分就労しているが、男性とは逆に52年より49分増加し、個別経営農家よりも17分多く就労している。作業別にみると、飼料畑作業に男性144分、女性87分就労し、特に、大三井協業経営では男女とも最も多くの時間をかけている。また、協業経営の男性は通勤、協業事務、作業打合せなどに165分かけている。

育成経営農家の女性は、給じ、掃除作業などの室内作業に290分従事し、室外作業にも215分従事している。また、養豚経営農家の男性は室内作業に376分と香取農家のなかで最も長い時間就労しており、女性も同様に325分従事している。作業別でも、男性は掃除作業に173分、女性は給じ作業に215分と最も長い時間をかけている。

以上、香取農家の勤労生活時間構造を経営組織別に検討したが、56年に酪農個別経営の飼養規模別階層の構成農家及び養豚経営の農家に若干の変動があったので、農家別の勤労生活時間の実数を第一表に付記した。酪農個別経営の各農家についてみると、飼養頭数が比較的少ないNo.1～5の農家では、1人1日当たりの勤労生活時間が多い傾向にある。また、世帯構成が不備な夫婦+老人(C)、及び夫婦+幼児(D)と夫婦労働力主体の農家のうちNo.1, 3では夫婦、No.6, 9, 11では男性、No.16では女性の勤労生活時間が多い傾向がみられる。更に、2夫婦世代構成にある農家でもNo.4, 12, 15の農家では男性の勤労生活時間が多く、No.5, 13, 18の農家では女性の勤労生活時間が多くなっているが、これら2夫婦構成農家では家族内農業従事者が多いから、家族の作業分担をより適切にすることによって就労時間を短縮する必要がある。

最後に、酪農経営農家の労働指標を第5表に示した。

搾乳牛飼養頭数は総数797頭、1戸当たり平均27.5頭となる。これを酪農労働従事者1人当たりでみると平均10.0頭となり、つばぬき協業経営では14.2頭と最も多くの搾乳牛を担当している。

次に、酪農労働従事者全員の総労働時間を1戸当たりでみると、平均1,548分となり、個別経営農家は1,721分、協業経営の総労働時間を1戸当りに換算すれば1,220分となる。最も多い階層は労働従事者の多い30～49頭規模農家で1,918分となり、15～19頭規模農家が1,869分と続いている。総労働時間を1人当たりでみると、平均561分となり、個別経営農家では574分、協業経営では531分となる。最も多く働いているのは、1～4頭規模農家の713分で、最も少ないのはつばぬき協業の521分である。また、搾乳牛1頭当たりの所要労働時間は、平均56分、個別経営農家62分、協業経営45分となる。最も多くの時間をかけているのは1～4頭規模農家の356分で、つばぬき協業が37分と最も少ない時間で飼養している。

更に、搾乳労働時間を1戸当たりでみると、その平均所要時間は308分となる。個別経営農家の平均は393分で、30～49頭規模農家が434分と最も多くの時間をかけている。これに対して、協業経営では平均147分とより少ない時間で搾乳していることになる。酪農労働従事者1人当たりでは、平均112分従事しているが、個別経営農家では131分を要しているのに対し、協業経営では64分と個別経営農家の半分の時間で搾乳労働を行っている。また、搾乳牛1頭当たりの搾乳時間は、個別経営農家では平均14分で行っているが、1～4頭規模農家では106分と30～49頭規模農家の9倍の時間をかけている。これに対して、協業経営では5分と更に少ない時間で搾乳を行って

る。

総 括

香取開拓農家は昭和56年に入植35周年の節を迎え、山間草地酪農の村として意欲的な歩みを続けている。酪農個別経営農家20戸の半数は、後継者の就農、結婚によって複数世代の基幹労働力を確保し、30頭以上の大規模酪農経営を達成している。また、酪農協業経営農家も協業組織によってゆとりのある労働に従事している。しかし、このような農家にあっても、なお、10時間を越える酪農労働に従事し、消費生活時間が圧迫されている。そして、一方では、今なお後継者が確保できなくて零細規模に甘んじ、しかも、12時間を越える長時間労働にあえいでいる農家や養豚経営へ転換した農家もみられる。更に、牛乳生産調整のため飼養規模拡大が望めない現状のもとで、意識調査の結果によると、経営を集約化し労働を省力化したいとする経営主が52%あり、農作業時間を減らしたいと希望している農業従事者が半数に達していることから、今後、酪農経営の集約化、複合化を計り、酪

農労働の省力化を計って長時間労働を解消するなどの内部充実を策することが要求される。そして、開拓一世の高齢化に伴う労働力の再編成を香取としていかに対応していくのか、今後の発展が期待されるところである。

本調査にあたり協力いただいた香取開拓農協の役職員をはじめ農家の方々に厚く感謝する。また、生活時間の調査、集計を担当した56年度農業労働科学研究室専攻生の布目清秀氏、現地調査と集計を担当した池田直明、沖田真司、金田和弘、代田博文、寺井千景、山根辰巳の諸氏に謝意を表す。

文 献

- 1) 福士俊一・田中 浩・藤井嘉儀：鳥取県香取農家の経営と生活。鳥大農研報，29 74～79 (1977)
- 2) 田中 浩・福士俊一・倉田悦美：鳥取県香取農家の生活時間構造。鳥大農研報，31 268～275 (1979)
- 3) 田中 浩・福士俊一：鳥取県香取農家の経営と生活(II)。鳥大農研報，36 136～144 (1984)